氷瀑

沙絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
氷瀑

【Ｎコード】
Ｎ４４２５Ｄ

【作者名】
沙絵

【あらすじ】
同棲８年のセックスレスの彼（１７歳年下）との別れの予感を感じるサエがハタチの翔（２３歳年下）によって自分と彼をみつめなおすまでを描いたある冬の日々。

第1話：与え合う

よりによってここ・・・
街の中心に位置する湖に近いラブホ。
ここは同棲してる彼と遠恋してる時いつも使ってた。
・・・８年くらい前だっけ
『カノジョときたりする？ここ？』
『たまぁに』
そういう翔のドライさがアタシに合ってると思った。
・・・アタシだって彼と来てたホテルに入ってるんだから翔と似たようなもん。
『もうちょっと照明落とせない？』そういうアタシに素直にベッドヘッドのボタンをいじってなおしてくれた。
『先、シャワーはいってくる』
そういってバスルームへいきながら服を脱ぐ姿をみて
・・・アタシの子供でもいい年齢だもんな。
２３年下のコといるアタシを再確認。
シャワーからあがってきたとき取りやすいようにバスタオルをドアの近くまで移動させた。
ついでにトイレに入ろうとしたらばっ！とシャワールームのドアが開いた。『あ！』と慌てて前を隠す、翔。
『別にみないよ』笑いながらトイレに入った。
『アタシも入ってくるね』そう言って服を脱ぎながらベッドルームから出た。
思い切りよく全部脱ぎシャワールームに入って髪を濡らさないように簡単に流した。
・・・簡単なもん。
同棲してる彼とは春以来、一回もシテない。セックスレス。
彼が朝帰りをする度、携帯が繋がらなくなる度、疑った。

・・・こんな簡単なんだもん、セックスすることなんて。
はっきり言ってアタシはセックスなんてご飯食べるのとおんなじ感覚だ。
ちょうど一週間前、翔とはじめて携帯で話した日に聞いた。
『オレ、ちょっと変な考えかたかもしれないけどカノジョってお付き合いしてるヒトじゃないですか、それはお付き合いしてるだけで好きなヒトって好きなヒトだし』
ハタチの翔はそう言った。
その感覚がアタシにちょうどいいと思った、思ってしまった。

第2話：認識（意識）

翔をはじめて認識したのは3か月前。短い秋が終わる頃。

事務所のデスクで仕事をしてたアタシの視界のはじっこに床に無造作においたビールサージャーを興味深げにしゃがみこんで見てるコがいた。

『どしたの？』

『これ、なんすか？』『あぁ、それサージャーだよ、ビールの。さっき古いやつを取り外してきたの』

そう答えてまたデスクワークを続ける。

・・・まだいじくってる

その時、うちでたまに働いてるコだって知った。

暫くしていつものように昼出勤したアタシに思い出したようにみんなからオヤジ扱いされてる男性社員が言った。『あ！そだ！あの現場忘れた書類届けないといけなかったんだ』

ってアンタ、車の免許持ってないじゃん、

アタシがいくってことね。

パソコンで調べた、

・・・あ、あのコ今日、行ってるじゃん。

携帯に電話する。

・・・『はい』・・・低い声・・・この声、好きだな。そう思いながら言った。

『お疲れ様、香椎だけど今日、確認書忘れてったでしょ？』

『あ、そかも』

『これから持ってくから携帯かけたら入り口まで出てきて』

『わかった』

営業車で事務所をでた。・・・ 天気いいし！ちょうど息抜きにはいいや！楽しくなった、別にあのコに会えるからじゃなかった、その時は。
現場について翔の携帯にかけた。
『どこすか？』
『ロビーの自販機の前らへんにいるから降りてきて』
すぐにきた、書類を渡したけど立ち去らない。
『ど？今日は楽？』
『ほとんど俺らがやってもう終わりっすよ』・・・ 得意気に言った。
『がんばったじゃん！』
『香椎さんってこっちの人？』
『ん？違うよ、』
地元の名前をいったら『知ってる、前に仕事でそっちのほういったことある』
ちょっとおしゃべりして『ほら、もう戻りな』『うん』
名残惜しそうに翔がいった。
『じゃね、あとちょっとがんばって！』
手を振って別れた。
ロビーにアタシのブーツの音が響いてる。
・・・ ジュースでも買ってあげればよかったかな？
それから事務所で何回か顔を合わせた。
『香椎さんって４３なの？』
別に隠してる訳じゃないけどその後に続く言葉に慣れっこになっている。
『わけぇな～信じらんねぇ』そ、だよ。
どういう訳かいつも１０以上若く見られる。
『アンタいくつだっけ？』
『ハタチ』
『お母さんっていくつ？』

『４３』
『同い年じゃん、ま、生めなくもないな』
『でも母ちゃんと全然ちげ～よ！』
『どゆとこが？』
『どこもかしこも！全部！』

それから時々、事務所で顔合わせたらおしゃべりした。
時には翔の仲間の同じくハタチのコらだけに話し掛けて翔には全く声を掛けなかったりもした。
ちらとも目を合わせなかったりもした。
アタシに声を掛けられず他のコとだけ楽しそうに話すアタシをちらちら、ふてくされた顔で見る翔を視界のはじっこに感じた。

１２月に入ってかなり慌ただしくなってきて仕事の合間にアタシは髪を切った。
事務所に仕事を終えた人達がごちゃごちゃいてその中に翔もいた。
次の仕事の説明をするアタシをじっと見て
『今日、なんか違くねぇ？・・・・あ！髪切った？』嬉しかった、彼なんて髪をカットしてこようがカラーしてこようが今やなんにも言わない。いつだったかなじったら『なんにも言わないってことは悪くないってことじゃん』
だと。
・・・・は～、ばーか。
そうしたもんじゃない、女はいつだって気にしてもらいたい生き物なんだよ。
・・・・『うん！切ったよ。前髪ちょっとつくった。可愛くなった？』
『うん』といって翔がちょっと上目遣いの目を逸らしながら顔を赤くした。
・・・・やばぃ、やっぱこの目も好きだな。

第3話：凍る滝

１２月のある日、仕事から帰って彼もいない部屋でスーツを脱いでいたらメールが入った。
翔からだった。
『電話ごめんね！なんとか落ち着いたよ、だいじょぶだよ！サエさんが一晩一緒にいてくれたらその次の日から仕事いくかな』
・・・ぐっときてしまった、不覚にも。
すぐに返事して服を着替えた。
着替え終わったらもう車をいったことのない翔の家の方へと走らせていた。
たぶんうちから山道を一時間くらい走る、もう夜中だ。
『サエさんもなんかあったの？俺んち遠いよ？』『実はもうそっちに向かってんだよね』
『え？じゃ着替えなきゃ！』『いーよ、いつもジャージじゃん』
『いや一応さ』

翔の家の近くのコンビニの駐車場についた。グロスくらいつけなおそ。そう思って暗い後部座席に手を伸ばそうと後ろを向いたら翔が見えた。
助手席のドアを開けて乗ってきた。
いつもより子供っぽい。『なんかいつもと違う、あ！髭ない！』
『葬式だし剃った』
そう、翔の祖母の今日はお葬式だった。
はい！とあったかい缶コーヒーをくれた。
『翔、酒臭い』
『嘘？もう匂わないべ？』『いや、いい匂いしてるよ』
じっと目を覗きこんで『てか、香椎さん、なんでこんなとこにいんの？』からかうように言った。

『うるさいな～てかなんでアンタも隣にいんのよ？』
笑いながら車を出した。
『どこいく？』
『ここらへんなんもねぇよ？』『だよね、どっち？右？左？』『左、滝いく？』『え？夜中に入れるの？』『たぶん、門閉まってないからだいじょぶ』
暗い山道を走る。なんにもない。
『ここらで一軒だけある、ラブホ』
『ふ～ん』
・・・このコ、アタシといきたいとか思ってんのかな。
真っ暗な山道にぼーっとピンク色と紫色に浮かび上がるそのラブホの看板をミラーで見ながらそう思った。
滝についた、階段をあがって誰もいないトンネルを二人で歩いた。
滝の音がしてくる。
『ここ、やばいんだよ、でる』
・・・トンネルの中って声が響く、いつもは観光客で賑わってうるさいくらいだけど今はアタシと翔の声しか響かない。
『マジで？アタシ憑依体質だから～今、落ちてるから憑かれちゃうじゃん』
『何？憑依体質って？』『なんかあるんだって！憑依体質の人って太りやすいんだと』
『全然太ってないじゃん』
『いや、前は今よりマックスで１３キロくらい太ってたんだ』『しんじらんね～じゃ、事務所のアイツくらい？』翔がだいっきらいな女の事務員のことだ。『いや、あのコはもっとあるかも』
『ぜって～無理！アイツは！』
『でもよ～く考えてみ？アタシとこうしてるよりあのコといる方がムリないんだよ？』
・・・その翔がだいっきらいというコは２７、
アタシは４３なんだから。『は？香椎さんとのほうが俺には普通だ

よ?』
そう言ってくれる翔が今のアタシには必要だった。だからアタシ、今ここにいるんだ。
アタシは自分に言い聞かせるように思った。
滝についた。
照明はついてたけど真っ暗な闇のなか流れ落ちる水が白い龍のようで吸い込まれる。
この滝は寒い冬の年は2月頃、全凍する。
ここ数年、全凍まではしていなかった。
・・・きっとこの冬は全部、凍りつく。
全て凍って欲しかった。
アタシのココロのように。
手すりが氷のように冷たい。つかまったアタシを後ろからぼんっと突き落とすマネをした翔が笑ってた。
しばらく滝を眺めベンチに並んで座った。
やっぱり氷のように冷たい指でお互いタバコに火をつけた。
他愛もないおしゃべりをした。
だんだん声も凍えてきたから
『もういく?』
といって車に戻った。
『今年は全部凍るかな?滝?』
『たぶん、凍るんじゃね?』
『全部、凍ったらまた見にこよ、ふたりで』『うん。』帰りは石段を降りるときちょっと翔の腕につかまりながら降りた。さっきのコンビニに戻り『トイレ借りてくるね』とアタシは車を降りた。トイレを済ませ戻ってきたアタシを改めて眺め翔がいった。『そんな格好してるといつもより益々わけぇな』『仕事ではスーツでスカートもはくけど普段はこんなだよ』
デニムに迷彩柄のチュニック、ムートンのブーツにラビットファーのジャケットを着ていたアタシを見ていった。コンビニの店長が地

元の先輩だからといって居心地の悪そうにしてる翔に従い車を単線の小さな駅の駐車場に移動させた。
そろそろ始発が動く時間。翔とどれくらいしゃべっただろう。
空が白みはじめて
『香椎さん、すっげ～眠そうだよ』
『だいじょぶだよ』
そう言いながらも目をつぶってしまいそうになるアタシを見てほら！というように笑いながら言う。
『だいじょぶだよ』
『見ててあげるからちょっと目つぶりなよ、『じゃ、ちょっとだけ・・・ここがいい。』
アタシは助手席の翔の胸の中に頭を預けた。5分くらい翔の心臓の音と彼とは違う服や体の匂いを深く胸に吸い込んでいた。誰かの肉のカンジが欲しかった、ずっと。
翔の肉のカンジを。
下から顔を上げて正面から翔を見た。
真っ黒な瞳と髭ない薄い唇が目の前にあった。たぶんアタシからくちづけた。
翔が受け止めた、堰をきったように求められた。何度も何度も。
漏れる吐息と唇が合わさる湿った音。
何度も、何度も。
うなじや耳にもアタシからくちづけた。
せつなそうな声を漏らす翔。
『俺、そのへん弱いんすよ、くすぐってぇ！』笑いながらまたくちづけた。翔はキスを繰り返すだけで服の上からも触ってこない。
アタシの腰にまわした手で何回も強く抱き締めている。
こうやって誰かに抱き締めてもらいたかった。翔に・・・？そう、翔に。
完全に夜が明けた。『もう帰りたい？』
『ちょっと』

そりゃそうだ、祖母の葬式の日に朝帰りじゃ、まずい。
今更、保護者感覚がでてきた。
『じゃあと１５分』
そう言ってまたくちづけた。
翔を家の近くのコンビニで降ろし次、会う約束をした。凍結してるかもしれない山道を下りながら朝日に向かって帰った。眠くて師走の街を窓全開で走った。途中、二回くらい気が付くとセンターラインをオーバーしそうになった。部屋についた、夕べアタシがでていった時と同じ、飲み会だといってた彼は部屋に帰っていなかった。

第４話：待ち合わせ

３日後、翔と仕事あがりに飲みにいく約束をした。その日は朝早くから事務所にはアタシ、ひとりだった。
スタッフが朝、ちゃんと起きてるかひとりひとり電話連絡をとる。
アタシは他のスタッフにするのと同じように翔にも電話をいれた。
眠そうな声で翔が電話にでた。
『ちゃんと起きてますか？今日も１日、お仕事宜しくお願いします。』事務的にアタシが言う。
『はい。』
翔もトーンを落とした低い声で返事した。
暫くして事務所の電話が鳴った。
『あ、翔っすけど。香椎さん？』
『うん、なに？』
さっきの事務的な声とは違う声で話すアタシ。『今、事務所ひとり？』
『そうだよ、時間間に合う？』
『だいじょぶ』
『ちゃんと着替え持ってでた？今日、遊べる？』
『持った、そのつもりだけど』
・・・探るような拗ねたような声で答える。
『うん、気をつけてきて』

仕事の集合時間に５分遅刻で翔がきた。
『じゃ、出発してください！』
他のスタッフを促しみんなが事務所をでていく。一番最後に翔がでる、『これ、あげる』『お、ありがと』
上目遣いでアタシを見ながら缶コーヒーを受けとる。

翔が仕事を終えて戻るより前に退勤した。
一旦部屋に帰り着替えて待ち合わせの駐車場へ。
・・・ちょっと本屋に寄っていこう。あてもなく書棚の本を一冊手にとり立ち読みする。
・・・こんな風に待ち合わせの前にあれこれ考えながら時間を過ごすのって何年ぶりだろ？一緒に暮らす彼とはこういう風にはいかないもんな。
ポケットに入れた携帯の振動がメールを知らせた。翔からだった。
『いま終わった！』
本を棚に戻しながら返事を入れる。
『了解！駐車場に移動するね』
車を走らせ駐車場へ。翔の車の正面に停めてタバコに火をつけた。
翔が帰ってきた。
携帯をかける。
『はい』
『お疲れ様、前にいるよ』
トランクに荷物をしまいながら携帯にでる翔を確認しながらゆっくりと車を横につける。『車、向こうに停めてくるね』
窓を開けてそう言うと車を駐車場の端に停めた。翔の車まで歩いていき助手席に乗った。『どこいこっか？なんか食べよ』
『うん。』
『ここらへんは誰かいるとやだからちょっと離れようか』
『そだな』

ちょうど夕方の退勤時間でこの周辺は渋滞する。結局アタシの知り合いの料理屋にした。車を降りるとき
『つっかけでいいすか？』
『いいよ、アタシそういうの気にしないから』
・・・アタシよりいい車乗ってるのにそういうとこ気取らないのはやっぱ若さかな？

そう思いながら店に入った。馴染みの店長が笑顔で迎えながらちょっと探るような目で二人を見ている。
車だったけどビールを飲みながら鴨すきを食べた。二時間くらいその店で過ごし会計を済ませ店をでた。店の隣のパーキングの車に戻った。
『どうする？』
・・・アタシが先にいった。『ん？』
ハンドルに顔を寄せて翔が見る。
『翔さんにお任せしますよ！』それには答えずに翔が車を出す。
でも行き先は決めてるように・・・。
おしゃべりをしながら街の中心に位置する湖に近いラブホテルについた。
・・・よりによってここ

最終話：溶ける、流れる

お互いバスタオルを一枚巻いただけの姿でベッドに横になった。
一日、力仕事をしてきてアルコールも入っている翔は眠そうだった。
・・・ほんとに眠いのかな？アタシとここでこうしてるけど、もしかしてやっぱり躊躇してる？
『今晩、泊まる？』
聞いてみた。
『いや、帰る』
『そうなんだ？』
『うん。』

おしゃべりが途切れて真っ直ぐにアタシを見た翔がキスをしてきた。
翔が横になったままアタシを上に引き寄せた。その体勢のまま翔に倒れこんだ。
タオルが少しずれてアタシの肩から背中、腰を確認するように翔の手が動く、抱き締められる。
アタシが翔におおいかぶさったまま布団に潜った。翔のを目をつぶったままで手で確認をしてそこにくちづけた。そのまま口にそっと含み彼とは形も違うであろう翔を包み込むように。
翔はうなじにキスした時のような吐息は漏らさない。翔の顔まで這い上がってきたアタシにまたキスをして今度はアタシが下になった。
少し斜めの格好で翔の指がアタシを責める。翔の指で逝かされそうになったアタシの声が漏れた。
翔が下になりアタシが上に・・・。
・・・ゆっくりとでも確実にアタシに添えた翔がそのまま入ってきた。腰を落とし深く繋がり翔の肩を掴む。
起き上がった翔が段々にスピードを増す。
もう、アタシは躊躇なく一番、深い女の声を出していた。一旦ふた

りの動きが止まり、アタシが主導権をもった。
自分の一番深い甘い部分はもう、アタシは知っている。
でもそれを今日、はじめて体を合わせた翔に伝えていいものか。
迷ったアタシはそれをするのをやめておく事にした。
翔のペースに合わせ弾むアタシがすこしづつ、でも確実に集中してくるのを感じた、とほとんど一緒に翔が声を漏らした、
『あ、俺もう・・・』
それを聞いたアタシはそのまま逝こうと思った。
その瞬間、翔がアタシの腰と自分の腰を引き離した。
アタシは翔の体の向かって右側に体を倒した。
タオルかティッシュで拭おうとしたアタシに『布団でふいちゃった！』『サイテー！』
二人で笑った。
タオルを体に巻き付けベッドの端に座ってアタシはタバコに火をつけた、翔も隣にきて火をつけようとしながらキスをしてくれた。
翔とのセックスはアタシの『ご飯を食べる』感覚に近いくらいやっぱりぴったりだった。服を着てホテルをでて夕方アタシの車を停めた駐車場まで送ってもらった。車から降りるときキスをして、
『家についたらメールしてね、おやすみ』といって手を振った。
次の約束はしなかった。それでいいと思った。
部屋に帰ると今日は出掛けなかった彼がダブルベッドでひとり寝息をたてていた。

携帯がぶるぶるっと震えた。
『いま家ついた、きょうは色々ご馳走さまでした！』
ちょっと笑いながらアタシも思った、『ご馳走さま！』

その夜は翔の匂いに抱き締められながらアタシを抱かない彼の隣で眠った。

その後、仕事で顔を合わせることはあったけど次の約束が決まらないまま過ぎていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・・・『今年の冬は見たいものがあるんだ』

『なに？』

アタシの顔をみないで隣に座ってる彼が返事した。

『今年は寒いからきっと全部凍ると思うんだ、その滝を見に行きたい。』

一緒に暮らすアタシを抱き締めなくなった彼にいった。

『いいよ、いこう。きっと凍るよ今年は寒いから』

今のアタシと彼のように凍るだろうか？

そして春にはまた解けて流れ落ちる。

そこに凍って一冬とどまった滝は新しく湧きでた水によって溶かされ押し出され流れ落ちるだろう。

凍った滝と同じ、

そこにとどまって、

また解けて流れはじめる。

アタシのココロと同じように・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4425d/

氷瀑

2010年12月11日22時15分発行